

Title	「共時性」とはなにか：1730年代の歴史記述を介して (その1)
Sub Title	Qu'est-ce que la "synchronicité" : à travers la description historique des années 1730 (Partie 1)
Author	鷺見, 洋一 (Sumi, Yoichi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.77 (2023. 10) ,p.1- 24
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20231031-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「共時性」とはなにか

——1730年代の歴史記述を介して（その1）——

鷺 見 洋 一

歴史における「通時性」

フランスにおける1730年代という時代を「共時性」という観点から論じるに際して、これはまず通常の「歴史」記述ではないということをお断りしておきたい。

おおかたの人にとって、「歴史」とは通時性と同義である。歴史はおおむねさまざまな「事件」や「事象」や「人物」を中心に、過去・現在・未来と繰り延べられる線状の展開として認識され、記憶される。19世紀の歴史学は、まさしく政治上の大事件とその周辺に織りなされる時系列の展開を対象とした、通時性の学問だった。

これら「事件」や「事象」に共通した特徴が一つだけある。それはいずれも明確な日付を持っているということである。フランス大革命は1789年、第一次世界大戦は1914年。日付がある以上、起きた順番に並べることができ、データが集まれば最後には年表や年譜として仕上がる仕組みである。私たちの頭のなかで紡がれる「歴史の流れ」、「思想史の流れ」の正体はほぼこれであるといってよい。過去から現在を経過して未来に向かって進む不可逆的な時間の連続であり、通時性を踏まえて展開する「物語」なのだ。

「事件主義」への疑問

20世紀初頭のフランスで、そうした歴史学の方法論を根本から問い直す

動きが生じたとき、批判の矢面に立たされたのがシャルル・セニョボス（1854～1942）によって代表される「実証主義」的歴史主義であり、のちに「事件主義」とも呼ばれることになる歴史学だった。セニョボスはシャルル＝ヴィクトール・ラングロワ（1863～1929）との共著で刊行し、一世を風靡した『歴史学研究入門』のなかで、歴史研究における「事実」、「事件」の重要性を強調する。セニョボスたちの歴史観を示す典型的と思われる文章を若干引用してみよう。

「歴史は史料によって作られ、史料は過去の事実の跡である¹⁾」。

「一般史の構成のためには、ある社会の状態であれ、その進化のひとつであれ、それを説明することのできるすべての事実を探求することが必要である。変化をもたらしたのは、これらの事実だからである。そして、こうした事実は、人口の移動、芸術や科学や宗教や技術の革新、支配者の交替、革命、戦争、諸国の発見など、あらゆる種類の事実のなかに探求されるべきであろう²⁾」。

「継続的な事実の場合には、すべて、いくつかの停止点、すなわち、始まりと終わりの限界を用意して、膨大な量の事実を年代順に区切ることができるようにすることが必要である。この区切りが時代である。この時代という概念は、歴史学においては、古くから使われたものである。それは、一般史のみならず、進化が認められるだけの長い期間の研究であれば、特殊史においても必要であろう。そして、その境界を画する手段として用いられるのが、事件である³⁾」。

以上、高校の歴史教科書でおなじみとなっている記述の要諦が見事に集約

1) Charles Victor Langlois et Charles Seignobos, *Introduction aux études historiques*, Hachette, 1897. 邦訳『歴史学研究入門』八本木浄訳、校倉書房、1989年。引用は邦訳からである（前掲書 p. 50）。

2) 前掲書、p. 202。

3) 前掲書、p. 203。

されているではないか。高等学校の「歴史の授業」を成り立たせている基本の素材（事実、時代、事件）が明快に定義されている。セニョボスにとって、歴史研究の重要な方法論とは、歴史的事実というデータ史料の整備と、意味づけであった。歴史家は、ある事象に関する記録媒体（＝史料）のどこからどこまでを切り取ってユニットにするかという分割作業と、ユニットに賦与すべき意味の構築にいそしめばよいのである。ところで、「事実」とははじめから内容が客観的に確定している史料であるからして、史料を扱う歴史家の仕事というのは、これまた客観的な「語り」によって諸史料を「事件」に仕立て上げ、並べ替えることに帰するのであり、最終的には年代記を作って、「事件」の流れを目に見える「語り」に仕立ててやれば終わりなのである。この手立てが20世紀初頭のフランスにおける中等教育で推奨されていた歴史観であったことは重要である。

思想史とメンタルモデル

半世紀以上も昔のことになるが、私が大学で研究対象にフランス18世紀を選び、大学院に入って自分の研究を進めるための方法や手段を模索していたとき、気がついたことがある。その頃、日本の大学における「フランス文学研究」というのは、18世紀にかかわる分野だけやや特殊な色がついているように思われた。つまり、1960年代に日本で主流を占めていた18世紀フランス文学の研究方法は、必ずしも「文学」と呼べるようなものではなく、もっぱらマルクス主義的傾向の強い思想史であり、その対象もほかの世紀の研究者と違って、小説や詩や演劇は二の次で、思想や哲学が優先された。面白いことに、この傾向は国内の数ある大学でも国公立の研究者に著しく、私立大学の人間は、大学院生まで含めて、詩や小説といったいわゆる「純文学」を偏愛するのが常であった。

ところで、「18世紀思想史」というのは、冒頭でのべた旧態依然たる「事件史」と違って、やや現実離れした、上層の空気の薄い大気圏を舞台とする歴史である。現実の事件や事象よりも、そうしたものを背景にしながら、そこから生まれてきた「著名な」人物や著作や思想を、高山の峰伝いに拾って

いく方法である。「事件」や「事象」はどこまでも地上のものだが、それらを背景として生まれてくる人物は天才や偉人としか呼べそうにない、浮世離れした例外的存在である。またそうした途轍もない巨人が書きあらわす著作は、とても凡庸な平均値や常識の枠などにははまりそうにない規格外の怪物的所産である。ヴォルテールの『哲学書簡』しかり、ルソーの『社会契約論』しかり、ディドロとダランベールの『百科全書』しかりである。こうした例外的天才や規格外れの著作に出会うという体験は、高山の比喩にあえて拘るなら、海拔8千メートルの高峰で突然巨大な雪男にでくわすようなものだろう。まともな人間であれば、まずは驚愕、畏怖、といった反応を示すのが普通ではないだろうか。ところが、そのとき若くて幼い私の心に芽生えたわが国の思想史にたいする根本的疑問は、思想史家と呼ばれる日本の先達研究者たちがいっこうにルソーやヴォルテールに驚いたり、感動したりする気配もなく、まるで天気予報を告げるアナウンサーのように、台風が来ようが、全国晴天に恵まれようが、淡々と『カンディード』を論じ、『エミール』を腑分けしてみせる、その憎いばかりに落ち着いた手捌きであり、冷徹な態度だった。日本の思想史家は驚くことを知らないか、あるいは知らない振りをするに長けた面々なのである。

徐々に分かってきたことだが、なぜ、思想史家が『百科全書』や『エミール』を前にして驚かなくて済むかという、かなり明白な理由があるのだ。ただその理由は、本人たちにはあまり自覚されていないだけなのである。ようするに、この人たちには「メンタルモデル」という頼もしい味方がついてたのだ。「メンタルモデル」とはなにか。一言で説明するのは難しいが、それはいくつかの「自明」な前提・仮説を組み合わせて構築された、まことしやかな「見本」ないし「類型」であって、どこにもマニュアルや入門書などないが、思想史を实践するすべての学徒が共有すべき無意識の思考モデルのようなものである。ひとたびこのモデルを身に着けてしまったら最後、そこから脱却するのは至難の業である。一度新興宗教につかまった人間が、容易に教祖の呪縛から逃れられないのとおなじなのである。

まず、このモデルの根本イメージは「流れ」であろう。歴史は「過去・現

在・未来」を貫流して進む時間であるからして、その線状の進行こそが思想史の基本型を構成している。「線」は流れ流れて研究者自身が位置する「現在」まで届く以上、研究者にとっては過去のいかなる出来事や事象も、すべて自分が立っている現在の場所にいたるまで、その線上に生起する現象なのである。従って、思想史家はいわば結論があらかじめ出ている問題を、答えを知らない振りをしながら解けばいいのである。「流れ」に竿さしつつ問題を解く要領は、過去・現在・未来をそのつど「因」と「果」とに読み替えて、前があったから後ができた」と説明する論理である。そうした「進歩的」、「通時的」フランス思想史の典型ともいえる記述の範例を、1960年代に東京大学出版会が刊行した思想史教科書から紹介しよう。

「われわれは、このようなルッソーの思想、とくにその社会理論において、イギリス思想、なかんづくロックの影響下に出生し、さまざまな方向に展開をみせながらも容易にその圏外に出ることのできなかつた『フランス啓蒙思想』の自己脱皮をみることができる。そしてその『社会契約』説は、君主制のもとでの経済社会としての市民社会の現実化というイギリスの現実の上にとつたロックの『社会契約』理論を超えて、はっきりと『共和制』を志向し、内面的人間の発掘による主体的根拠づけと相まってフランス革命、とくにジャコバン党の指導理論となる⁴⁾」。

たった数行の文章ではあるが、1960年代の「進歩的」な通時的総括の特徴がよく表れている。順に拾っていくだけでも、「影響下」、「出生し」、「方向に展開」、「自己脱皮」、「超えて」、「志向し」、「指導理論となる」、といった具合に前へ前へと「進歩」し、「直進」する思想の運動性だけが異常といえるほどの強度で浮き彫りにされている。私がいささかの軽蔑をこめて「喇叭を吹く」と呼ぶことにしているこうした表現は、上の引例もまさにそうで

4) 中村雄二郎・生松敬三・田島節夫・古田光『思想史／歴史的社會を貫くもの〔第2版〕』東京大学出版会、1961年、p. 154。

あるが、論文の末尾の段落に集中して多用される。冷徹な天気予報士が、ここだけ突然自己陶醉するのである。奥付をみると、この書物は初版が1961年、1977年に第2版1刷、1994年には第2版12刷に達しているから、東京大学を中心とした全国の国公立大学のキャンパスでは圧倒的な評価をえていた思想史の「メンタルモデル」として長期間君臨していたのである。

「進歩」する流れを重視する線的な歴史観に囚われた研究者は、「前から後へ」という因果関係の桎梏が強いので、どうしても視野が狭くなり、論文制作においては、あらかじめ決めた答えを資料に求める研究に傾きがちになるのは当然である。そして、こういうモデルの「流れ」にひとたび身を任せてしまえば、論文はいくらでも書けるのだ。日本の思想史家にけっこう多作な人が多いのはそのためである⁵⁾。

アナル学派の登場

旧態依然たる歴史学にたいして、「新しい歴史学」を打ち立て、大きな成果をあげたのがフランスのアナル学派であったことはよく知られている。学派誕生は1929年、リュシアン・フェーブルとマルク・ブロックが『経済・社会史年報』を創刊した時といわれるが、当初から書評欄などでシャルル・セニョボスたち「事件学派」への敵意を剥き出しにし、「政治史」、「事件史」をじぶんたちの研究対象から締め出してしまった。

なかでもアナル学派の第二世代を代表する歴史家だったフェルナン・ブローデルは、歴史の事象をそれぞれの特性から3種類の「持続」に分けて考察した。すなわち主として政治史を中心として展開してきた従来の歴史学の範疇である「短期持続」（いわゆる事件史）、一定の周期で動く「中期持続」または「複合状況」（コンジョクチュール）、そしてもっとも深部にあって動かない「長期持続」または「構造」である。そして、ブローデル史学の大きな特徴は、自然環境や気候などを含む「長期持続」と、「市場経済」、「資本主義」、「世界＝経済」などが変化・展開する「中期持続」とをもっ

5) 日本の思想史にたいする批判はこれまでいろいろな場所に書いてきたが、最新のものは拙著『編集者デイドロ』平凡社、2022年、p. 888-892である。

ら記述の対象とし、「事件」を扱う「短期持続」にはほとんど関心を示していないことであった。というよりも、ブローデルは多々ある歴史記述のなかから、あえて「長期持続」と経済史を選んだのであった。

「それ〔経済史〕は、ある一つの観点から見た人間の全体史である。それは、ジャック・クールとかジョン・ローとかいった人物が主役と見做されるような歴史であると同時に、大きな事件が次々と起こる歴史であり、『複合状況』と経済危機の歴史であると同時に、『長期持続』の流れのなかでゆっくりと変化する鈍重な構造的な歴史でもある。まさに、ここに問題の難しさがある。四世紀間にもわたる、しかも世界全体を対象にして、かくも膨大な事実や解釈を一体どのようにして系統立てることができるだろうか？ 選択せねばならなかった。私は、長い時間の枠組のなかでの深層での均衡と不均衡とを選んだ⁶⁾」。

ブローデルの「選択」は、かくして「長期持続」と「複合状況」を的にする運びとなり、超大作『物質文明・経済・資本主義』として結実したのである⁷⁾。

アナル学派第3世代は、1969年、ブローデルが若い研究者たちに指導権を譲り⁸⁾、かくして1971年、新しい編集スタッフによる『経済・社会史年報』の特集号「歴史と構造」が刊行されたときに誕生した。70年代以降、アナル学派はブローデル風経済史から心性史、歴史人類学に方向を転じることになるのである。その結果、第1、第2世代ではまだ「変化」や「動き」の相に関心のあった学派は、ますます「事件」に背を向けるようになったの

6) フェルナン・ブローデル『歴史入門』金塚貞文訳、中公文庫、2009年、p. 13-14。

7) フェルナン・ブローデル『物質文明・経済・資本主義 15～18世紀』村上光彦・山本淳一訳、みすず書房、1985～1999年、6 vols。

8) 若い研究者たちとは、アンドレ・ビュルギエール、マルク・フェロ、ジャック・ル・ゴフ、エマニュエル・ル・ロワ・ラデュリ、ジャック・ルヴェルである。

である⁹⁾。

新しい「事件論」：モランとバルト

アナル学派の政治史嫌い、事件史忌避は長いこと論議を呼んだが、もっぱら中世からアンシャン・レジーム期を調査・研究の対象としてきたアナル学派とその周辺に、「現代」への関心が芽生えるにつれて、「事件」へのまったく新しいアプローチが試みられるようになったことは注目されてよい。そうした動向を生んだきっかけとでもいえるものがあるとするれば、1968年にパリで勃発し、世界中に波及した学生や労働者を立役者とする、あの未曾有の「5月革命」以外にはありえないだろう。

狼煙を上げた先駆的論文はいくつかあるが、たとえば革命の「現場」であったパリの「ラテン区」、サン＝ミシェル大通り38番地にあるアパートのバルコニーから、催涙弾が炸裂する街路の紛争を目撃していた歴史家ピエール・ノラの証言は忘れがたい¹⁰⁾。ノラの功績は、もっぱらテレビなどの「マス・メディア」がいかに視聴者を巻き込み、生きた歴史の現場に立ち会わせてくれるかを強調したことであった。もうひとつ、私が当時衝撃を受けた文章は、文芸批評家ロラン・バルトによる「事件のエクリチュール」という短いテキストである。やはり1968年の「5月革命」勃発直後に書かれ、『コミュニケーション』誌に発表された¹¹⁾。記号論者バルトは、どこまでも現場で発せられた「ことば」にこだわる。まず「ことば」と題された章はさらに3分割されて、「ラジオの話すことば」、「危機のことば」、「学生たちの話すことば」になる。「ラジオの話すことば」は、たとえば警官隊と対峙す

9) エマニュエル・ル・ロワ・ラデュリがブローデルの後任としてコレージュ・ド・フランスの教授に赴任した折、記念講義のタイトルは「動かない歴史」であった。

10) Pierre Nora, « L'histoire toute crue », *Le Nouvel Observateur*, spécial littéraire, 20 novembre-20 décembre 1968, p. 4-6.

11) Roland Barthes, « L'écriture de l'événement », *Communications*, 12, 1968, p. 108-112; repris dans *Le Bruissement de la langue*, Points / Seuil, 1993. ロラン・バルト『言語のざわめき』花輪光訳、みすず書房、1987年。

るデモ学生たちが、当時人気のあったソニー社製トランジスター・ラジオを携帯していて、自分たちの一挙手一投足を描写して伝える実況アナウンサーの声に耳を傾け、また前方に展開する警察機動隊の動きについて情報を得て、そこから新しい戦術を編み出すといった、デモと放送とがいつしか相互に依存し、一体化してしまうような複雑な状況を指している。ここでは「ことば」と「行動」をひたすら対立させて論じてきた、ジャーナリズムの、さらには歴史家の、古い概念枠が破産しているのである。「危機のことば」は、「コミュニケ」、「記者会見」、「宣言」、「スピーチ」などの5月革命を通して四六時中反復された言語が、危機に「ついで」の表現であると同時に、危機「そのもの」でもあるという事態を指している。「学生の話すことば」は、街に展開した学生が広場や街路を占拠するのとまったく同じに、「ことば」（その一例が一世を風靡した、「禁止することを禁止する」といったカルチエ・ラタンの「落書き」である）を奪取したことを指している。以上の記号論者バルトの論考は、遡ってフランス大革命の記述にも有効である¹²⁾、むしろ、私がこれから試みようとしている革命以前のアンシャン・レジーム期の事件記述にも参考になると思われる。本稿の中核をなす1730年代という時期にフランスで継起したさまざまな事件も、当時のジャーナリズムが量産した報道言語の「背後」にではなく、まさにその「直中」に読み取られる必要があるのではないだろうか。

5月革命後、しばらくの沈静期を経て、1970年代にフランスの研究者を中心に、「事件」というものを改めて問い直す一連の動向が姿を現した。とりわけ雑誌『コミュニケーション』（1972年第18号）が、社会学者のエドガー・モランを監修者に立てて、「事件」特集号を刊行したのが話題を呼んだ。その後、堰を切ったように量産されたおびただしい事件論の端緒ともいえるこの特集号には、モランのほか、前述の歴史家ピエール・ノラ、さら

12) すでに私は1789年10月の「ヴェルサイユ行進」と呼ばれる事件の報道記事めぐって、バルトの方法を適用した論文を書いている。鷲見洋一「第2章 1789年 ヴェルサイユ行進」、『いま・このポリフォニー 輪切りで読む初発の近代』おねうま舎、2019年、p. 79-112。

にアナル学派系の歴史学者としてはエマニュエル・ル・ロワ・ラデュリがいるだけで、あとはおどろくほど多様な分野からの執筆者を集めた画期的な論文集になっている。とりわけ自然科学畑からの寄稿者が多く、医学、脳病理学、精神分析学、物理学、認識論哲学などの専門家が名を連ねている。物理学者ベルナル・デスパニャが量子力学のボーアとハイゼンベルクに言及しているのも、「^{シンクロニシティ}共時性」という観点からみるときわめて興味深い。のべ17名の執筆者が寄稿しているが、監修者モランは巻頭と末尾の論文を執筆し、さらに序文代わりに「^{エヴェヌマン}事件」と題した小論を寄せているほどの力入れようである。1970年代初頭はレヴィーストロースなどが唱導する構造主義が全盛期を迎えており、「偶然」や「暴発」、「変異」などフラクタルな要素を忌避する傾向が強かった当時のフランス思想界で、これはかなりの冒険だったと想像できる。

その後、事件論はしばらく哲学・思想分野の底流となって、あまり出版界の話題として取り上げられることもなくなったが、2010年に事件論の総集編ともいべき大著が日の目を見て、一つの転機を迎える。フランソワ・ドス『事件の復活。歴史家への挑戦：スフィンクスとフェニックスのあいだ¹³⁾』である。ドスは1950年生まれの歴史家で、すでにマルクス主義やアナル学派から距離を置く世代に属し、主著『断片化した歴史¹⁴⁾』では、アナルやマルクス主義や構造主義の「全体」思想を批判的に論じている。『事件の復活』は2010年という刊行年からも分かるように、1968年の5月革命から40年以上を経過しているのみならず、2001年という新世紀を迎えた早々の9月11日に、「アメリカ同時多発テロ事件」という、その規模においても衝撃度においても5月革命とは比較にならないほど巨大な「事件」に遭遇して、その深刻な余韻のなかにあり、68年の5月革命を熱っぽく語るエドガー・モランたちとは一線を画している。ドスは5月革命とその余

13) François Dosse, *Renaissance de l'événement. Un défi pour l'historien: entre Sphinx et phénix*, Presses universitaires de France, 2010.

14) François Dosse, *L'Histoire en miettes. Des "Annales" à la "nouvelle histoire"*, Paris, La Découverte, 1987.

波にあてた1章¹⁵⁾において、革命の10年ごとの記念行事とメディアや論壇の反応を詳細に分析し、たとえば70年代に猛威を揮った「新哲学者たち」^{ヌーヴォー・フィロソフ}による評価などを検討する。また、2008年には事件の40周年を記念して、ミシェル・ザンカリーニ＝フルネルによる決定版ともいえる資料集が刊行され¹⁶⁾、早くも5月革命を美化する「黄金伝説」の傍らに、ようやく革命に水を差すような「暗黒伝説」が生まれてきたことを指摘している。そこからドスが引きだしてくる結論は以下のようなものである。

「批判的な解釈学は、言葉のよき意味における修正主義者であれと私たちを促すのである。すなわち、私たちが手にする真理は、新しい資料の発見とか、記憶に関する変動とか、現在から発せられる新しい問いとかに応じて、つねに修正されなければならないのである¹⁷⁾」。

事件と共時性

先行理論の紹介はこれぐらいにしておきたい。私はアナル学派のように「不動の歴史」を求めて教区簿冊や気候の長期変動を精査する体力・気力もないし、歴史の表層に泡のように浮かんでは消える大小さまざまな出来事の記述に淫する趣味もない。ただ、日本という遠隔の地において、ある外国の過去を対象に記述を試みようとする営みは、出発点における最初の手がかりとして、どこかに痕跡を残してくれている事象、すなわち大小の「事件」の解釈から始めざるをえないと考えている。むろんその事件記述は、「政治史」一辺倒の19世紀的な歴史記述とは一線を画する必要がある。従来政治史は、悪くするとただの世界史年表の焼き直しになる危険があり、大新聞の第

15) François Dosse, « Le cas de l'événement Mai 68 : une prolifération de sens », in *Renaissance de l'événement*, p. 261–272.

16) Michelle Zancarini-Fournel, *Le Moment 68 : une histoire contestée*, Seuil, 2008.

17) Dosse, *op. cit.*, p. 271.

一面を飾る大見出しをつないで、時系列に整理した線状の羅列と選ぶところなくなるからである。私が考える「事件」はいま少しニュアンスに富んでいる。「事件」を「圏域への侵犯」という相で捉えるからだ。ここからが本論の核心部分である。

そもそも「圏域」とはなにか。「圏域」とは啓蒙期のフランス人が世界や社会や他人や自分という所与を受け止め、思い描き、判断する時に依拠していたとおぼしき枠組みである。いわば同時代人の「メンタルモデル」である。本論文の冒頭近くでのべた「メンタルモデル」は現代の思想史家が勝手に拵えて、18世紀に当てはめている都合のいい図柄を否定的に紹介したのだが、ここでいう「メンタルモデル」とは、18世紀人自身がさまざまな現象を收容するに際して、望むと望まざるとに関わらず依拠していた分類や整理の枠組みを指している。

18世紀人の「メンタルモデル」とは、まずもって人びとの「常態」である。人びとが心身両面で実際に生きていた「現場」のあり方である。「常態」や「現場」の把握は、ともすれば日記や回想録に近い事実や事象の平板な列挙に終わる危険があるだろう。そこで設定したのが、全部で10の「圏域」である。論じる対象を各「圏域」に分類して、全体が立体的に見えるように案配したのである。この圏域概念の設定と分配には異論もあるだろうが、私個人の能力の限界を考えれば、これ以上に分類を専門分化したり、いたずらに圏域の数を増やすことはできなかった。

以下に分類された10種類の圏域設定については、③④⑤についてのみ、ユルゲン・ハーバーマスの『公共性の構造転換』を参考にして¹⁸⁾、とりわけ哲学者のジョルジュ・ベンレカッサがフランクフルト学派、なかでもハーバーマスの圧倒的影響下で執筆した名論文に、「圏域」(sphère)という用語自体を含め、多くを負っている¹⁹⁾。ベンレカッサの難解きわまりない論

18) ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換 市民社会の一カテゴリーについての探究』第二版、細谷貞雄・山田正行訳、未来社、1994年。

19) Georges Benrekassa, « Sphère publique et sphère privée : le romancier et le philosophe interprètes des Lumières », *Revue des sciences humaines*, t. LIV, n°

文については、いずれまた稿を改めたい。ただ、ヴォルテールやモンテスキューは、こうした「メンタルモデル」の格子枠を介して、世界を、社会を、他人を、自分を認識していたのであろう。

- ① 自然圏域 → 気温、天候、氷河、災害、自然感情
- ② 経済圏域 → 税金、財政、物価指数、農業ほか産業一般
- ③ 政治圏域 → 王権、政府の政策、宮廷の動向、戦争、外交
- ④ 公共圏域 → 社会、世相、メディア、サロン、公衆、世論・公論、噂
- ⑤ 私的圏域 → 家庭、日記、手紙、自己イメージ
- ⑥ 生活圏域 → 衣食住、消費、教育、風俗、市場、交通
- ⑦ 概念圏域 → 信仰、思想、哲学、出版
- ⑧ 表象圏域 → 詩歌、美術、演劇、音楽・オペラ、ユートピア
- ⑨ 身体圏域 → 性愛、遊戯、健康と病、薬品、治療、美容、服飾
- ⑩ 隠蔽圏域 → 恐怖、異常、犯罪、処刑、地下文書、検閲

以上のうち、①から⑨までの圏域は18世紀人の「常態」を分類整理したものである。そして⑩の圏域が、人々の常態である諸圏域への突発的な闖入である「事件」を網羅する分野であり、通常は政府やメディア、場合によると当事者自身によって隠蔽されがちなところから、「隠蔽圏域」と呼ぶことにする。むろん、①から⑨までの圏域に収まる事象でも、「事件」と呼ぶにふさわしい出来事はあるだろう。①でセースが大洪水を起こして大勢が死んだり、③で外国の軍隊が突然国境を越えて攻め込んできたり、⑥で異常な奇形児の誕生が報告されたりといった事例はいくらでもありうる。

もう一つ強調しておきたいのは、以上の10圏域に属する出来事や事象に、研究者側の主観や嗜好、主張に根ざした色づけを施し、いつのまにか因果関係の絆で結び合わせようとしてはならないということである。1960年代の思想史家であれば、①自然圏域を不動の「背景」として据え置き、②経済圏

域と③政治圏域とが世界を動かす中心分野であるとして多くのページを割き、④以下をさながら泡のごとく政治と経済の周辺に漂う社会的・文化的浮遊物として片付けるとするのが常套手段であろう。私の立場はまったく逆さまである。諸「圏域」のあいだに価値の上下や優劣はありえない。すべては特定の歴史的瞬間にそれぞれなりの意味と必然をもって生起した「共時性」の産物だからである。複数の事象のあいだに短絡的な因果関係を性急に求めず、むしろ「メタファー思考」（一見関わりのない観念や事物を結びあわせる思考）という複合的な方法をあえて適用したいと考えている。まことしやかな論理の糸が指し示す直線状の方向性、漸進性を嫌い、あえて遠隔の観念や思想を水平に結びあわせ、ありえない結合や関係から新しい切り口を模索していくのである。

あえて試みたいメタファー思考の適用法が、「共時性研究」である。「共時性」の歴史は、同時多発の歴史記述である。おおかたの研究者が愛用する「通時記述」の因果論や影響論や進歩史観をみずからに禁じることにはかなり無理があるにせよ、なるべく控えめにしたい²⁰⁾。メタファー思考は場合によると、たがいに隔たった「圏域」同士を結び合わせるようにして働くことがある。ある圏域に生じた現象は、それ自体としては特定の命名や分類に一対一対応するものではなく、ほかの圏域に現れた出来事との組み合わせで隠れた意味や含蓄を露呈することがあるのだ。メタファー関係にある存在や事象は、単独でいるよりも、時空を超えた「関係性」のなかでこそ、なにかを伝え、意味を発することが多いのである。

それと通時研究によくみられる縄張りへの配慮（演劇を論じる場合は、化学や政治といった異ジャンルに言及するのは控える）を斥けるから、横へ横へとテリトリーは広がる傾向になる。タイムスパンの設定が狭くなるのは当然で、数年から一年単位、一月単位といった、世界史年表であれば、数セン

20) 通時性と共時性については、若嶋眞吾の書物が参考になった。若嶋は私が「メタファー思考」と呼ぶものを「感応律」と名付け、「因果律」、すなわち通時的な志向と対立させている。若嶋眞吾『もう一つの「知」～二つのコスモロジー～』竹林館、ソフィア叢書、2006年。

チか数ミリにもなるかならないかのような短い期間に限定して、記述がなされる。本論は「1730年代」として対象を1734年前後の10年に限定している。あまりにも資料が膨大すぎるので、スパンを短くしないと、試みとして破綻する危険があるのだ²¹⁾。ここでは1730年代の「共時性」の歴史記述にしばらくお付き合い頂きたい。

共時性研究の資料

まず、1730年代のパリに住む人びとに近づき、その目線でパリ住民の作り上げている独自の世界をとらえてみる必要があるだろう。そのための一つの手っ取り早い方法は、当時よく参照されていた重要資料にあたることである。年鑑の『アルマナ・ロワイヤル』に登場願おう。これは18世紀紳士録とでもいうべき書物で、1683年に出版業者のロラン・ドゥリが創刊し、類書との競争を生き延びて、1700年から『アルマナ・ロワイヤル』を名乗り、

21) じつをいうと、1970年代から80年代にかけて、フランス人研究者の共同研究という形で、啓蒙時代のいくつかの年を対象に、多角的に分析するという試みがなされたことがある。私の試みもこれらの共同研究に多くを負っている。① Pierre Rézat, Jean Sgard (dir.), *Presse et histoire au XVIII^e siècle : l'année 1734*, Editions du CNRS, 1978 ; ② Jean-Claude Bonnet, Jean Varloot, Paule Jansen (dir.), *L'Année 1768 à travers la presse traitée par ordinateur*, Editions du CNRS, 1981; ③ P. Jansen, J.-L. Lecercle, M. Baridon, ... [et al.] (dir.), *L'Année 1778 à travers la presse traitée par ordinateur*, PUF, 1982. 以上の3点は、分野を異にする複数の研究者による共同研究論文集であると同時に、数百のキーワードをコンピューターに入力して収集した定期刊行物のデータを、専門別にまとめた作業の成果であるという特徴を持つ。タイトルからも想像できるように、すべて定期刊行物を対象にした共同研究の成果である。とりわけ①は、本論文で私が積極的に依拠した書物であり、啓蒙期のある1年を選んで共時的に記述する試みを最初に実現した歴史的成果である。以下、①所収の個々の論文を引用する際には、*Presse et histoire* と略記する。また、有名な「ダミアンの犯行」で知られる「事件」の経過と反響に関する詳細な調査報告としては、以下の共同研究がある。Pierre Rézat (dir.), *L'Attentat de Damiens. Discours sur l'événement au XVIII^e siècle*, Lyon, Éditions du CNRS / Presses Universitaires de Lyon, 1979.

1792年まで刊行された。その後もタイトルを変えて、1919年まで続いたことが知られている。重要なことは、1744年にロラン・ドゥリの孫に当たるアンドレ＝フランソワ・ル・ブルトンが出版権を獲得したが、この人物こそほぼ同時期にディドロたちを雇用して『百科全書』を刊行する野心家の出版業者だったのである²²⁾。

ここでは1730年代を代表する年として、1734年を選び（その理由はいずれ明らかになる）、この年の『アルマナ』を重要資料として利用したい。1734年版『アルマナ』は500ページ近い大冊で、ヴェルサイユを中心にこの年のフランス全土に配備された主立った制度や役職と、そこに関係するおびただしい人物を満載している²³⁾。「アルマナ」(＝暦)という表題通り、まず最初の30ページで1年間の気象情報（一日ごとの陽と月の出と入り、月の満ち欠けなど）が克明に記される。35ページ以降が、アンシアン・レジーム期独自の優先順位による要人紹介である。まずフランスの王家、王族、ついでヨーロッパの王家、フランス宮廷の高官、高位聖職者、大修道院長、元帥以下の軍人、法曹界のトップ、国王顧問会議のメンバーから官庁のあらゆる役職者など。

『アルマナ・ロワイヤル』の最後の140ページが、多少とも人文研究にかかわってくる記事で埋められている。まず、「大学」4学部、ついで各種「王立アカデミー」、そしてディドロやルソーや『百科全書』に関心のある者にとって看過できない人々、すなわち王立検閲官のリストが印刷されている。つづいて金融関係の情報が詳しく記され、徴税請負人などがリストアップされる。諸外国駐在の外交官、両替業者、ヴェルサイユとパリ市の医者、外科医、薬剤師、地方別の郵便馬車や駅馬車情報、河川交通情報、全国の定期市、王立農業協会、鑑定人・公証人、正誤表と索引。

22) ル・ブルトンについては拙著『編集者ディドロ』（既出、p. 347–348）を参照のこと。

23) *Almanach Royal, pour l'année MDCCXXXIV*, calculé au Méridien de Paris, à Paris, au bas de la rue de La Harpe, de l'Imprimerie de la Veuve d'Houdry, au Saint-Esprit. 1734.

以上のようなアンシアン・レジーム期の国家と社会を構成する人間関係の網の目を介して浮かび上がってくるのは、この時代の「政治圏域」のすべてである。この精細をきわめた収集と網羅は、私たちが日頃原書や研究書を読んで作り上げている、啓蒙社会についての「文系」に偏ったかなり気儘なイメージとはまったく違う、場合によっては非人間的で組織的な、国家と社会の途方もない全体図をあたえてくれるのである。

なぜ 1734 年か？ 先に種明かしをすれば、この年の前後にこそ、18 世紀フランス文化の基本的動向を示す出来事や兆候が、奇跡のように集中しているからなのである。あえて目立つ出来事を列挙すれば、1734 年前後の文学・思想の困難な状況、たとえば「小説禁止令」などがあり、1737 年のルーヴル宮におけるサロン展再開、1739 年に『テュルゴの地図』が刊行されるなどが、主たる表面上の根拠である。

また、当時の社会にどういう「人間」がいたかという「フランス国民の分類」を調べよう。どこまでも「上から目線」ではあるが、当時の国家が時折、とりわけ戦時に試みては失敗することも多かった「人頭税」というものがある。「人頭税」によるフランス国民の階層構成化の統計結果が、1980 年代の歴史家たちの研究成果として刊行されている²⁴⁾。これは戦時の臨時「人頭税」として財務大臣が全国民を 22 カテゴリーに階層化し、それぞれに税額を割り当てた一覧表である。たとえば第一階層はほとんどがヴェルサイユの王族・貴族で、「王太子」から「徴税請負人」までの全部で 20 種類の肩書きにたいして 2000 リーヴルずつの税金が課されている²⁵⁾。最下層の国民は 22 番目の階層で、19 種類に分けられ、税額はたった 1 リーヴルである²⁶⁾。ちなみに、最後にくる第 19 番目のカテゴリーの内訳は「船舶やガレー船、私略船や商船に乗り組む外国人水夫」である。

もう一つ、当時の人間にとっての書物の分類がどのようなものだったかを

24) François Bluche et Jean- François Solnon, *La véritable hiérarchie sociale de l'ancienne France. Le tarif de la première capitation (1695)*. Droz, 1983.

25) *Ibid.*, p. 99-100.

26) *Ibid.*, p. 114.

吟味しよう。最良の案内として、歴史家フランソワ・フュレが膨大な蔵書売り立て記録などを集計してえた「理想の図書分類表」がある²⁷⁾。全体は5部構成で、Ⅰ 神学と宗教、Ⅱ 法律と判例、Ⅲ 歴史、Ⅳ 学問と芸術、Ⅴ 美文学に分かれる。最後の「美文学」のところを詳しく見ると、a 辞書、b 文法と文献学、c 詩文芸（①詩歌、②劇作術、③小説、④書簡）、d 雄弁家、e 諧謔文学、f 新聞と定期刊行物、g アルマナ、h 雑報となっている。本稿でたまたま詳しく論じることになる予定の「定期刊行物」「アルマナ」「雑報」が文学ジャンルの最下層に位置づけられているのも偶然ではあるまい。

定期刊行物の重要性²⁸⁾

1734年についての記述を、モンテスキューやヴォルテールなど有名作家の著作と動静を紹介するだけに終わらせたくないのであれば²⁹⁾、どうしても当時の「事件」や「報道」を把握する必要がある。そして、それには定期刊行物および日記・回想録類の調査が欠かせない。世紀初頭から大革命期にかけて、定期刊行物は激増し、徐々に文化と社会の核心部に浸透して、無視できない「メディア」を形成した。ジャン・スガール監修になる『新聞事典1600–1789』の本格調査によれば、とりわけ1730年～1749年にかけてその動きは目覚ましく、1730年代の毎年の創刊件数は以下のようになっている。1730（13件）、1731（7件）、1732（4件）、1733（8件）、1734（9件）、1735（7件）、1736（5件）、1737（10件）、1738（17件）、1739（6件）³⁰⁾。

27) François Furet, « La < librairie > du royaume de France au 18^e siècle », in Geneviève Bollème ... [et al.], *Livre et société dans la France du XVIII^e siècle*, Mouton, 1965–1970, I, p. 14–16.

28) 18世紀における定期刊行物一般については、以下の拙著を参照されたい。鷺見洋一『編集者デイドロ』平凡社、2022年、p. 320–324。

29) たとえば、以下の論考などが典型的なものであろう。Georges May, « L'année 1769. Voltaire, Rousseau et Diderot. Grandeur et servitude de l'âge et de la gloire », *La Pensée*, n° 146, août, 1969, p. 110–127. メイの調査はいわゆる啓蒙「ご三家」の同時比較に終始しており、私が考えるような「共時性研究」ではない。

30) Jean Sgard (sous la direction de), *Dictionnaire des journaux 1600–1789*, 2

1734年を対象にした統計調査を踏まえた論文を読むと³¹⁾、この年の定期刊行物には大きな特徴がいくつかある。定期刊行物は4つのタイプに分類される。Aは「ガゼット」タイプ。4紙あって、いずれも政府寄りの広報紙。年平均1100万字の情報量である。Bは「学術・文藝」紙。8紙あり、年に1000万字近い。Cは『メルキユール・ド・フランス』に代表される一般向け娯楽紙で「メルキユール型」と呼ばれ、年に1300万字。最後のDは、「文学」専門紙で150万字と小さい。刊行頻度もまちまちで、週刊か月刊か、年に何号かといった具合にばらばらである。

定期刊行物は全体として4つの機能を備えた極がある。1番目は「情報の極」で、これは「ガゼット」が担う。2番目は「知識の極」で、書評欄が充実し、もっぱら書籍を扱う。刊行速度が遅く、逆にページ数は多い。3番目が「芸術・美文学」として取り上げられる文学の極を担う。文学の創作を扱い、概して小型の12折版で、刊行は必ずしも定期的ではない。これはいわば精神や情念の情報誌といえる。最後の第4番目の極は「習俗」を扱う。往々にして劇場やアカデミーの情報を含む制度にかかわるページが入る³²⁾。

総じて、定期刊行物はその時代の情報メディアのなかでもっとも忠実に「公衆」の成長や欲求を反映する器なのである。「公衆」といっても、それは読み書きのできる教養ある読者層であって、いわゆる「雑報」欄に登場する無名の下層民とは一線を画するものであることは当然である³³⁾。

雑報の美学

「雑報」(Le fait divers) という表現は18世紀には存在しなかった。ラルース辞典によれば、初出は1863年の『プティ・ジュルナル』紙らしい。いわゆる「雑報」はそれから以後、19世紀のジャーナリズムを席捲するが、18

vols, Universitas, 1991, t.2 (J-V), p. 1139.

31) Claude Labrosse et Pierre Rézat, « Les périodiques de 1734 : essai de typologie », *Presse et histoire*, p. 23–24.

32) *Ibid.*, p. 23–24.

33) *Ibid.*, p. 25–26.

世紀にも類似の記事はあった。たとえばプレヴォの『*Le Pour et contre* 甲論乙駁』(1734年)を繙いてみれば明らかである³⁴⁾。

当時、雑報記事のモデルとして幅をきかせていたプレヴォ『甲論乙駁』を読むと、大雑把に3種類の記事があることがわかる。①「確かな事実」「出来事」「現象」「事象」などで、いわゆる「自然の怪異」に属するもの。②人間個人にかかわる出来事で、あまりの途方もなさに道徳的コメントを誘発するもの。③「報告」「珍事」「挿話」「物語」の類で、日付や場所は明示されるが、どこか創作の匂いがし、文学の域に近い。それに加えて、こうした記事のインパクトには、プレヴォの作家的才能が大きく物を言っていたことも見逃してはならないだろう³⁵⁾。

『ガゼット・ダムステルダム』は、週2回刊行の新聞で、そうした雑報の特別欄を設けていた。他のページにも、今なら雑報としてしか扱えない報道があるが、編集者たちにとってはそれらは王家、貴族、軍事、外交の範疇におさまるもので、報道記事にも社会の階層秩序が反映していたのである。雑報の特別欄とは、そうした階層から締め出された無名の民のためのページなのであった³⁶⁾。たとえば『ガゼット・ダムステルダム』を追っていくと、「雑報の地理学」とでも呼べる地域性の偏向が認められる。1734年の54件の雑報のうち、パリは26件、ロンドンが18件、地方が5件である。読者層の興味からしてパリとロンドンが一番だったのだ³⁷⁾。暦(季節の遷り)に見る雑報の周期のようなものも興味深い。一般に「出来事」は春と夏の終わりに激増する傾向がある。総じて3月～4月、8月～9月が盛期であり、6月～7月、10月～11月が落ち込む。3月～4月の活況の一つには謝肉祭が終わり、司法活動が再開することも関係しているだろう。大規模な裁判は概して復活祭の後に行われる慣わしだった。8月～9月の場合は、ほかのカテゴ

34) Robert Favre, Jean Sgard, Françoise Weil, « Le fait divers », *Presse et histoire*, p. 199–200.

35) *Ibid.*, p. 200.

36) *Ibid.*, p. 201.

37) *Ibid.*, p. 201.

リーが枯れ気味で貧しく、勢い「自然の変異」などの雑報に頼るといふことらしい。20世紀の報道で、ネス湖の怪獣が必ず8月終わりに登場したのと似ているのだ³⁸⁾。

『ガゼット・ダムステルダム』の雑報が伝える54件の「出来事」を類型別に分類してみると、①訴訟20件、うち13件がパリで判決の出ているもの、②12件の火災ないし気象上の事故災害、③11件の殺人、暴動、④10件の「変異」（うち4件が100歳を越える長寿の人物にかかわる）となる³⁹⁾。『ガゼット・ダムステルダム』は大新聞で、富裕な事業家のブルジョワジーを読者にしており、掲載記事は主として宮廷の外交、軍事関係が多く、雑報の占める役割は読者に社会的不安を与える出来事を迅速に伝えるという務め以上のものではない。『ガゼット・ド・フランス』はその点、絵に描いたような宮廷御用新聞で、雑報はまったくない。概してフランス語の定期刊行物は自己検閲装置が強く働いており、雑報の持つ脅迫的で不安な側面が警戒されているようだ⁴⁰⁾。

ガゼット・スタイルの大新聞の対極に、独特の魅力を発散する小型新聞がある。ガゼットが収録しない情報を満載するからである。こうした小型メディアのモデルは『甲論乙駁』であった。同紙のサブタイトルにある「新しい趣向」の定期刊行物 (*ouvrage périodique d'un goût nouveau*) とは、「英国趣味」のことであり、読者の興味をかき立てたばかりか、他紙にコピーされ、女性読者の関心を惹いた⁴¹⁾。

そうした情報の流通経路としては、発端が警察などの報告から生まれる手書き小冊子の生な記述であり、それがガゼットなどのニュースとして取り上げられ、最後に文学的・道徳的尾ひれを付けて報道されるのだった。雑報はまず社会的言説を形成した。巷の噂、サロンでの会話、書簡の話題などの「情報源」から、ジャーナリストは目撃者ではないので、事件を直接記述は

38) *Ibid.*, p. 201–202.

39) *Ibid.*, p. 203.

40) *Ibid.*, p. 203–204.

41) *Ibid.*, p. 204–206.

せず、そこにある種の同質なスタイルを刻印する。つまり面白そうなこと、新奇な出来事性を選んで書き、より上位の刊行物（印刷されたもの）に提供するのである。ただし、お偉方のスキャンダルなどはご法度で、度が過ぎるとバスティーユが待っている。おのずと、「無名の民衆」が主役であるような「途方もない出来事」や「自然の変異」を話題にするのである。ついで「楽しませること」がある。世界の動きを「距離を置いたところから」観て楽しむのだ。ここには読者に息継ぎの余裕を提供する「逸話」や「秘密の打ち明け話」などが取り込まれる。暇つぶしのおしゃべりは、往々にして「宗教、政治、社会」に関する出来事のまっとうな解釈を隠蔽する役割を果たす。また、そういう場合の「出来事」についての記述は、断片的で因果関係も曖昧であり、要するに一過性の情報でしかない。人々を不安にするような要素が毒消しされているのだ。雑報はつまるところ、「宗教」や「道徳」の教訓が介入して終わる運命にある。犯罪者は罰せられ、自然災害は天の怒りで片づけられるのだ⁴²⁾。

だが、忘れてはいけないのは、雑報が「文明化」された社会の不気味な裏面を垣間見せることである。それは支配層が日常ほとんど目にするものがない、小ブルジョワジーや無名の下層民の存在、歴史に登場しないだけにおそれられる存在を炙り出しているのである⁴³⁾。

定期刊行物がなぜ共時性研究にとって重要か。それは当時量産される書物の大半が、「作法」が要求する規範に則ったテキストであり、内容の如何を問わず、その整然とした「形」によって否応なく「安全」であるのにたいし、ときに剣呑とされた小説ジャンルの作品と並んで、ある種の雑誌や新聞のなかに、当時の検閲官や「良識派」にとって、どこか「不穩」で「不気味」な感情を喚起する報道が含まれているからである。フロイトは「不気味なもの」という論文で、作家の E.T.A. ホフマンなどを例にとりながら、「不気味」といういわく言い難い感情について考察を進め、こうのべている。

42) *Ibid.*, p. 211–214.

43) *Ibid.*, p. 217.

「第一点。感情の蠢きに伴うすべての情動は種類を問わず、抑圧されることでどれも不安に変換される、と主張する点で精神分析理論が正しいでしょう。すると不安を掻き立てるものの事例の中には、その不安を掻き立てるものとは抑圧されたものが回帰しているのに他ならないことが示されるグループが存在するに違いない。この種の不安を掻き立てるものこそ、まさに不気味なものだろう。第二点。もしこれが実際に不気味なもの秘められた本性だとすれば、言語の慣用が内密なものをその反対に、つまりは不気味なものに変換するという事態も理解できる。というのも、不気味なものとは実際、何ら新しいものでも疎遠なものでもなく、心の生活には昔から馴染みのものであり、それが抑圧のプロセスを通して心の生活から阻害されていたにすぎないのだから。抑圧へのこの関係は、不気味なものとは隠されたままにとどまっているべきなのに現れ出てしまった何ものかに他ならないとするシェリングの定義の意味をも、今や我々に明らかにしてくれる⁴⁴⁾」。

「共時性」研究でもっとも重要な作業の一つは、対象となる時代の人びとにとって、「分類しがたいもの」を見つけることである。ある時代の「分類しがたいもの」が一番見つかりやすいのは、定期刊行物の雑報欄なのである。ロラン・バルトの挙げる例では「パリ裁判所清掃さる」の一行。これだけではつまらない。ところが続きがあるのだ。「100年来はじめて」。これでありっぱな雑報ができ上がる⁴⁵⁾。普通、「裁判所」と聞けば、掃除が行き届いたよく光る床を思い浮かべる人が多い。そこが実は1世紀もの間、清掃されていなかったという報道は、「裁判所」のイメージとわずかに矛盾し、読み手の興味を駆り立てる。普通、掃除が行き届いていそうな裁判所が一世紀もの間清掃されていなかったという事態は、読者の頭のなかでそう簡単に納得され

44) フロイト「不気味なもの」藤野寛訳、『フロイト全集』第17巻、岩波書店、2006年、p. 36。

45) ロラン・バルト「雑報の構造」渡瀬嘉朗訳、『エッセ・クリティック』篠田浩一郎・高坂和彦・渡瀬嘉朗訳、晶文社、1972年、p. 254-266。

えない。このわずかな矛盾こそが「雑報」の生命なのだ。「警察署長、妻を殺害」。これも立派な雑報である。普段は殺人犯を捕まえるのが仕事の警察署長が、自分の配偶者を殺してしまった。この「些細な」矛盾が雑報を作る。「警察署長、大統領を殺害」では、立派な一面記事に昇格してしまうのだ。雑報が面白いのは、ニュースに含まれる因果関係がやや混乱しているからである。因果関係の乱れ、逸脱、これこそが雑報を「文学」たらしめるのだ。そこからいわゆる「小説」へはさほど遠い道のりではないのかもしれない。

(つづく)